令和４年度　府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネージメントプラン）（計画段階・実施段階）

令和５年３月30日

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
組織・運営	個に応じた指導の推進と指導状況の共有等を通じ、教育活動の充実を図る。	・学校経営計画の各評価領域の具体的方策について、目標に対する進行状況を点検・共有等することにより、高い達成状況を実現する。	D	D	C	・　主に事後での課題や問題事象の共有や助言より、事前に助言することが必要であった。今後は、適時の進行管理を励行していきたい。
	本校の魅力を積極的に発信するとともに、志願者数の増大を図る。 家庭・下宿・寮における好ましい生活の支援を図る。	・学校説明会等で、特色ある教育活動・専門教育の魅力を中学生及びその保護者に発信することにより、持続的な観点での志願者数の増加を図る。 ・寮、下宿担当者及び教職員間の連携を密にし、諸課題の共有と解決に努める。	B A	B A		・　引き続き、広報活動を充実させるとともに、中学生や保護者から信頼され、必要とされる学校づくりを推進していく必要がある。 ・　保護者等向け学校評価アンケートにおける寮・下宿指導の満足度＝91％（寮30/32、下宿41/46）。新型コロナウイルス感染症関連を含め突発的に対応を要する事象が複数あったが、寮・下宿運営部を中心に適切に指導・対応ができた。引き続き、下宿生を中心とする生活の安定を支援していく必要がある。
総務企画部	専門学科や進路、部活動等の取組を中心とする中学生目線を基にした積極的な広報に努め、本校の魅力を発信、アピールする。	・　「ホームページ・広報資料・学校説明会」を軸に、受け手（保護者、中学生等）を意識した内容の精選や質の向上等を図り、本校の魅力を効果的に発信する。	A	A	A	・第１回：「学校説明会に参加してよかったですか。」 「よい」91.8%「ほぼよい」7.5% 第２回 「よい」100% 第３回（中１・２年生対象） 「よい」93.8%「ほぼよい」6.2% 総合99.8%(「よい」「ほぼよい」合計平均) 昨年度98.8%（＋1.0%） 志願者状況より広報活動の効果は見られるが、次年度は地元を意識した取組の強化が必要である
	系統的な人権教育により、生活の中に生かされる指導を行う。	・　系統的な人権教育を推進するために、次の４項目を掲げる。 ①計画的な人権学習・人権講演会の実施　②人権だよりの発行 ③文化委員会の人権啓発の取組　④道徳教育取組まとめ	B	B		・①人権講演会を４回、人権学習を３回実施 ②１回発行 ③ボッチャを体験し、文化祭で発表 ④１回作成 今後へ向け、人権教育の成果が継続、定着するような工夫をする。
教務部	カリキュラム・マネジメントの推進により教育活動の質を高め、学習効果の最大化を図る。	・新学習指導要領に基づく学習評価や履修内容の精選に留意した年間学習指導計画、指導シラバスを編成し、各科目の円滑な授業進行を目指す。	A	A	B	・　カリキュラム・マネジメントの一環として、教科担当を対象に「教科指導に関するアンケート」をFormsにて実施。日々の授業は教科担当者の81%が予定どおり又は、予定以上に年間指導計画に基づいて授業を進めることができた。 来年度に向けて、年間学習指導計画を早期から準備し、指導と評価の一体化をより適切なものとなることを目指したい。
	新学習指導要領に基づき、より適切な観点別評価の実施と教科指導力の向上を図る。	・公開、研究授業への参加や、観点別評価等の新学習指導要領への円滑な移行を目的とした研修を実施し、教員の指導力と生徒の学力向上を目指す。 ①公開授業への参加１人あたり３回以上 ②観点別評価に関する教職員研修の実施３回以上 ③年次進行を踏まえた新３観点別評価の試行案作成率80%以上 ［①～③達成率］ A：90%以上／B：70%～89%／C：50%～69%／D：50%未満	A			・　公開・研究授業週間では、教員１人当たり3.8回の参観、参観報告書は約250枚となった。 観点別評価の研修では、評価方法入力率は95%以上の他、学習評価に関わる教科主任を中心に会議と研修を４回実施、１年生の観点別評価に関わる指導と評価の概要一覧を学期毎に作成した。 現２、３年生の学習評価については、86%の講座で新３観点を踏まえた学習評価を試行、実施した。 令和４年度末の学習評価及び総括を含め、今後さらに検討を重ねることで令和５年度１・２年生の学習評価に繋げたい。
	端末機器等のＩＣＴ活用を推進し、社会のデジタル化への対応力を高める。	・教職員のICT機器の活用を推進することで、生徒の授業理解を促し、生徒の満足度の向上に繋げる。 ①ICT機器活用に関わる教職員研修３回以上 ②教科毎のデジタルコンテンツ整備（製作等）数１回以上 ③授業評価アンケートにおける満足度項目平均3.5以上	B	B		・　リモート授業や学習アプリの利用方法に関わる全体研修の他、ICT機器活用にかかわるTeamsへの掲載、C-Learningによる生徒の出欠管理等、教職員対象の説明や研修を多数実施した。 新たに制作もしくは既存のデジタル教材の活用率は教科担当全体で80%だった。教材を制作している教科担当者が増えており、今後もデジタル教材の拡充を目指したい。 今年度からC-Learningを活用した授業評価アンケートを実施、１学期末の結果は平均3.4、２学期末も3.4であった。 今後はICT利活用の推進を通じて学習効果を高めることを目標としたい。
	読書活動を通してことばの力を高め、豊かな思考力を醸成する。	・読書活動を推進して生徒の健全な成長を促すことで、学校生活をより充実したものとする。 ①ICTを活用した教職員向けの読書啓発を11回以上実施 ②図書委員による読書啓発活動を11回以上実施 ③図書室で１冊以上本を借りた生徒の割合92%以上	B			・　デジタル化したBookList2022及びLibrary for Teachersや読書紹介動画をTeamsやC-Learningで９回配信した。 図書委員会活動は、おすすめ本紹介や読書推進の動画作成と配信、学校祭での放映等、活動は13回以上となった。 図書室で１冊以上本を借りた生徒の割合は80%となった。 今後も読書の機会を増大させることで、生徒の読む力を高めたい。
生徒指導部	生徒指導の考え方を共有し、一貫した指導体制を図るとともに、それぞれの課題に応じた指導を推進する。	・個に応じた指導の推進と指導状況の共有を図る。	C	C	C	・　生徒指導部会18回、生徒指導部打ち合わせ３回の計21回実施した。連携や情報共有を図ることができた。 多様な生徒が在籍する中で、学年部を中心として他分掌との連携をさらに進めていきたい。
		・生徒自らが主体的に規範意識やモラルを高める取組みを組織的に推進する。	C			・　３回実施した。 今後も自転車安全利用推進員の啓発活動を充実させ、交通マナーの向上や事故防止に努めたい。
進路指導部	学年部及び関係分掌・コースと連携し、進路実現に向けての統一した指導を実践し、希望進路を実現させる。	・進路検討会議等で進路に関する情報の共有化を図り、個に応じた適切な指導を展開することにより、希望進路を実現させる。	B	B	B	・　学年・分掌及び学科・コースとの情報を共有することで、３年生１人１人の第１志望に92%の合格・内定を得た。（卒業後の進路未決定者1名）来年度は更に生徒情報の共有を充実させ指導に活かす。 加えて、今年度の進路行事では校外の団体からの協力を得て１部対面で実施することができた。
保健部	学校生活を安心安全に送ることができるよう継続的な感染予防対策を定着させる。	・各分掌と協力し学校生活の中での継続的な感染症予防対策の定着を目指す。 検温や健康観察、出欠席など生徒の健康状態の把握の効率化および継続的な予防対策の定着を目指す。	B	B	C	・　昨年度から継続し状況に応じて朝の検温、体調チェックを実施した。またマスクの着用、こまめな手指消毒、食事時の黙食の励行など感染予防対策の定着に取り組み、校内における感染拡大の防止を一定図ることができた。次年度は新型コロナの扱い方の変更に合わせ、生徒の学校生活に即した感染予防対策を構築していきたい。
	施設点検及び清掃時の点検を定期的に行い、改善が必要な箇所の早期発見に努め、学校の衛生環境の充実を図る。	・事務部と連携し、定期的な校内点検を行う。（月1回を目標とする）	D	D		・　今年度は計画どおりには実施することはできなかった。次年度は環境衛生の充実に向け校内清掃活動等の点検の強化を図りたい。
	支援を必要とする生徒に対して、情報のとりまとめを行い各分掌と連携したきめ細かい支援に努める。	・迅速なケース会議、教育相談会議の開催に努力し、学年部、ＳＣと連携し個別の支援が必要な生徒の支援内容の共有化を図る。	B	B		・　１月中旬までに12回のケース会議、４回の教育相談会議を実施し支援内容の共有化を図った。 ・　SSWと連携し外部の関係機関の活用をすることができた。次年度は、様々な事情を持つ生徒への学習保障等の配慮を更に進めたい。
事務部	円滑な教育活動が展開できるように効果的で適切な業務執行に努める。	・年度末予算執行率の縮減に努める。 ・前年度踏襲に徹することなく、工夫を凝らした業務処理に努める。	C	C	C	・　予算執行は、予算不足に陥ったことから年度末に集中することはなかった。 しかし、予算執行計画に工夫をこらし、教育効果を生み出すところには至らなかった。 ・　一部事務処理遅延が発生し、十分な内部統制ができていない結果となってしまった。 今後については、校内個別研修を根本から見直す。
	職員の資質向上と生活改善を図る。	・事務部としての総実労働時間の縮減に努める。 ・センター研修等の府の研修の受講の推進をすすめる他、校内自主研修を実施する。				・　年間で前年と比較し20%の減少となった。引き続き業務の効率化に努めたい。 ・　校内自主研修は実施できなかった。 今後の校内事務室研修の持ち方の検討を要する。
みずなぎ	全ての航海実習を通して安全・安心を徹底する。	・乗船実習時、前における集合操練を実施するとともに、救急コール携帯の徹底を図る。	B	C	C	・　救急コール携帯を徹底した。 ・　集合操練　10回実施した。
	組織・運営と連携し、小中学校の体験航海の増大を図ると共に一般団体の体験航海も受け入れる。	・組織・運営と打合せをし、年間の体験航海を増大させる。	D			・　新型コロナウイルスの影響で小学生の体験乗船が減少となっている。 ・　８月までに船内見学、体験乗船、合計11回実施した。 （令和４年度、体験乗船は18回）
	船舶コース・学校外機関と連携しアカムツの改良網について研究を深める。	・実習担当教員と連携を深め、知識や技術の向上に努める。	C			・　新型コロナウイルスの影響で底曳網漁業実習の回数が少なくなっているが、底曳網漁業データは京都府水産事務所と共有している。 次年度に向け、項目別の危機対応マニュアルを確立させ、底曳網漁業実習の安全対策を徹底する。
	新型コロナ対策	・船内消毒を行います。	C			・　体験乗船前後の消毒。実習前後の消毒。 当直中、数回の消毒をしている。

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
寮・下宿運営部	寮生・下宿生及び保護者が安心安全に生活を送るとともに、集団生活の中で学校全体を牽引する人材を育成する。	・寮生・下宿生・保護者・下宿管理者と密に連携を図るため、面談及びアンケートを実施する。	C	C	C	・　寮生・下宿生アンケートを１回、寮生・下宿生ミーティングを合計６回実施した。 寮生・下宿生との面談は、個々の生徒の状況に応じて実施し、生徒理解を深めることができた。 寮生・下宿生の保護者等と密に連絡を取り合い、連携した生活指導ができた。 下宿管理者とは、ICTを効果的に活用し、情報共有や連絡を取り合うことができた。 今後は、寮生・下宿生の増加に伴う個別対応が増えてくることが予想されるため、ICTの効果的な活用を推進するとともに、寮・下宿運営部内での役割を明確化し、組織として対応していくことを心がけていきたい。
		・寮・下宿運営部の運営を円滑に進めるために、役割分担を明確に行い、情報共有を密に行う。	C			・　４月以降、寮・下宿運営部会を合計８回実施した。 １カ月に１回の実施とはならなかったが、寮・下宿運営に必要な情報共有は確実に実施した。 部会以外の場面では、個々の部員間での情報共有を確実に行い、寮・下宿を円滑に運営することができた。 今後は、働き方改革を推進する観点から参集型の部会の実施回数は必要最小限に留めるため、ICTを効果的に活用していきたい。
第１学年部	基本的生活習慣と学習習慣の確立を図り、進路実現に向けた学力の伸長を目指す。	・学力伸長の取組を図り、成績上位層を伸ばす。	B	C	C	・　成績優秀者の数は１学期18名。２学期17名。クラス平均６名。高い意識を持って学習に取り組む生徒が一定数いる。進学補講の機会も利用し、学習意欲を喚起した。
		・資格や検定等の取得を目指して、計画的に学習する習慣を身に付けさせる。	D			・　２学期には、全員が普通救命講習修了証を取得。その他、危険物取扱者試験乙４類に５名、丙種に５名が合格、第二級海上特殊無線技士では11名が合格したが、１人当たりの資格取得数は伸びなかった。
	さまざまな教育活動を通して自己有用感や人権意識を育み、生徒一人一人の内面からの規範意識の向上を図る。	・ボランティア活動等の課外活動に積極的に参加し、自己有用感を高め、社会に積極的に参画する意欲と態度を養う。	B	B		・　小学生への学習補助（プラスワンスタディ）に参加した生徒は３名、自転車安全利用推進員講習会に参加した生徒は10名。また11月に開催された「出前高校生議会」には39名が参加し、意見交流を行った。
		・学年集会やHR活動を通して、他者を認め、尊重する態度を育む機会を積極的に設ける。	A			・　各学期に２～３回実施する学年集会で、人権尊重の観点から諸注意や訓話を行った。
	生徒一人一人の学習･生活面での課題を早期に把握し、円滑に課題解決が行える環境を整備する。	・個々の生徒の学習･生活面での課題を早期に把握するとともに、進路実現に繋がるコース選択を行う。	D	D		・　個人面談は６月と10月に実施。個別対応を重視したため、全体としては２回のみであった。次年度は、全体としての面談設定を企画するとともに、個に応じた適時な面談を実施していく。
第２学年部	希望進路実現に向け、個々の実績づくりとよりよい人間関係づくりをサポートする。	・希望進路の具体化を図ることで、学習意欲の向上につなげる。	C	C	C	・　＜進路希望調査＞ 海洋科学科：就職１、進学20 航海船舶C：就職13、進学１　　海洋技術C：就職８、進学８、未定２ 栽培環境C：就職10、進学７、未定５　食品経済C：就職10、進学１、未定３ ＜反省等＞ 未定の生徒については、春季休業中に家庭内で話し合いをしてもらうよう働きかける。
		・考査前、学年部による学習会を実施し、学習成績の向上につなげる。	C			・　＜成績優秀者数＞ 学年末 R3　　計17名 R4　１学期末 計20名（１組７名、２組６名、３組７名） ２学期末 計18名（１組６名、２組５名、３組７名） ＜反省等＞ 個別指導等、学年部でも対策を図りたい。
第３学年部	希望進路実現に向け、教科、学科コース、分掌等と連携を図り、学習に関する基礎的環境整備と個に応じた指導に努める。	・学力向上の取り組みを行い、授業や家庭学習に向けての意識の向上を図る。	D	D	C	・　平均6.68 進路決定者が多く出る２学期から、成績低下が目立った。進路決定後も新たな目標設定をする等の機会を作り、モチベーション低下を防ぐ取組が必要であったと反省している。次年度に引き継ぎたい。
	希望進路実現に向け、関係分掌、学科コース、保護者と連携を図り、丁寧な指導を心掛ける。	・希望進路を実現させる。	B	B		・　第１希望合格率89%。 公務員希望者の合格率が伸び悩んだ結果であった。公務員希望者の不調理由として、基礎学力や準備期間不足が挙げられる。入学当初から公務員試験に向けての意識付けや、計画性を持って取り組ませる必要があると感じている。
	日々の学校生活を大切に過ごし、基本的生活習慣の確立を目指し、適切に行動できる生徒を育てる。	・教科、学科、コースと連携を図り、日常的な点検や声掛けを行う。	D	D		・　年間51名指導。 特に進路決定後の３学期初めに服装、頭髪指導を受ける生徒が増加傾向にあった。内容としては、頭髪加工等の今まで無かった指導内容もあった。実習等の危険な授業もあるので、それらを踏まえた指導を心がけた。
	規範意識を高めるとともに人を尊重する心を育て、良好な学校生活が過ごせるように努める。	・日常的に規範意識や人権意識の向上に努め、他人を尊重する心を育む。	A	A		・　学年独自で５回実施。 公共の場でのモラルやマナー等の指導を学年集会やアンケート等を用いて行った。また、学年だけでなく生徒指導部とも連携を図った指導を行えたことは効果的であった。
BYOD運営部	1　一人一台端末導入に係るハード面、ソフト面の環境整備を行い、ICTを円滑に利用できる学校づくりに取り組む 2　ICTの利点と危険性を理解し、教職員が教育の質の向上に利活用できる知識と技能の向上に取り組む。	・予備端末や貸出端末の管理や、端末活用ガイドブックの整備等、生徒が端末を利用できる環境整備に取り組む。	A	A	A	・　将来を見通した端末の管理運営計画を作成した。 ・　教職員・生徒の端末利用促進に向けて、活用ガイドブックを作成し、関係分掌等と連携して指導に取り組んだ。 ・　次年度は、学校図書館を活用したICT教育の推進に取り組みたい。
		・ICTを活用した教育活動を推進するために、指導用端末ならびに生徒用貸出端末の利用環境向上に取り組む。	A			・　教員用端末を整備した。 ・　利用環境向上のため、office365のアカウント整備と、本校の教育活動に必要なアプリケーションの整備に取り組んだ。 ・　モバイルルーターの増設などに取り組み、ICTを更に多くの機会に活用できる環境整備に取り組む。
		・府立高校ICT利活用 新しい授業づくりリーダー育成研修で習得した知識や情報等を教職員に周知し、学校全体のICT教育推進に取り組む。	A			・　公文書にて通知のあった内容や研修等で学習した内容を、TeamsやBYOD運営会議等で共有を図った。 ・　働き方改革に適した形で知識と技術の伝達を行うために、短編研修動画を作成した。 ・　次年度は、校務でのICT活用推進を図るために、校内研修を充実させたい。
海洋科学科	・「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させ、進路選択・決定における自己実現を支援する。 ・令和５年度より開始する「課題研究」分割履修や観点別評価等についての研修を深める。	・第３学年において、希望進路を実現させる。	C	B	B	・　81.8%(11名中９名）達成 国公立四大４名、私立四大６名、専門学校４名、文科省管轄外国立短大校１名、公務員１名、就職１名、未定１名。 引き続き自らが目指した希望進路に向かって、主体的に取り組む力を身に付けさせたい。
		・２年「キャリアチャレンジⅡ」及び「総合実習」の運用方法を検討する。	B			・　４回実施 ICT活用により、多様な課題を課すことができ、生徒のさまざまな力を見出すことができるようになった。今後も研修を行い、評価についてさらに検討していきたい。
航海船舶コース	専門性の高い資格・検定に挑戦することにより、主体的に学習に向かう姿勢を身に付けさせるとともに、専門性の涵養に努める。	・　ICT活用や補習等を推進し、自ら学ぶ姿勢を育成する。 〈資格毎数値目標〉 海技士（三級２名、四級７名）、第二級海上特殊無線技士11名 小型船舶操縦士（一級７名、二級12名）、漁業技術検定11名	C	C	C	・　年度末評価 三級海技士１／２名 四級海技士７／７名 第二級海上特殊無線技士　５／９名 小型船舶操縦士（一級７／７名、二級12／12名） 漁業技術検定９／15名 ２・３年生ともに資格取得数が落ち込んだため、次年度は家庭学習習慣が身に付くよう日頃からの取組を意識する。

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
海洋技術コース	・生徒の専門性の向上 ・関連進路先への就職、進学	海洋技術コースに関連する資格取得・検定合格を通じて、生徒の専門的な知識や技術の習得を図る。また、企業見学や業務体験を通じて進路意識の向上を図り、コースに関わる進路指導へと繋げる。	A	A	B	・　海洋土木に関連する資格・検定の取得について全員合格を目指して指導に当たり、合格率の平均は90%以上を達成した。今後は合格率100%を目標に、指導方法の改善と工夫を重ねたい。 一方で、高圧ガス製造保安責任者（丙種化学特別）の資格に合格するなど、高度な専門知識や技術を習得させることができたため、今後も継続して指導していきたい。
			A			・　公園整備実習や潜水・土木工事現場の見学を計５回実施した。これにより、生徒の進路意識や学習意欲の向上、専門性の向上を図ることができた。 今後も、海洋土木に関連する現場見学等を積極的に取り入れ、生徒が関連進路先を選択するきっかけとしたい。
	・外部との連携強化 ・研究内容の検討と深化	丹後半島沿岸海域の環境保全及び地域振興を目標とした新たな研究テーマを創出する。また、各種堆肥の製造及び栽培実験等の研究を外部と連携して行うことで、堆肥製造の更なる深化を図る。	A	A		・　阿蘇海に分布するアマモ場の潜水調査や造成、地元オリーブ園と協働した堆肥の研究開発、他校と連携したアマモ場造成技術の研究など、計７回取り組んだ。 潜水調査・研究活動の実施は季節や天候等に大きく左右されるため、次年度も、早めの計画と確実な実施を心掛けたい。
			A			・　ヒトデやウニを使った堆肥製造、小学生への環境啓発活動、地元イベントでの堆肥販売、オリーブ堆肥の製品化など、地域との連携を重視した堆肥の製造・販売・啓発活動を計10回取り組んだ。 今後も、海洋工学科の指導目標を踏まえつつ、堆肥を通じて地域と連携することに重点を置いて活動を展開していきたい。
	教員自身がより専門性を高められるよう努める。また、教員研修などをとおして教員としての資質・能力の向上を図る。		C	C		・　校内研修では、年間通して計２回研修を実施した。研修の機会を多く設けることができなかったため、今後は、ICTの活用等、より効率的な工夫のもと研修を実施したい。 外部講習では、高圧ガス保安講習会、粉じん作業特別教育講習、特定化学物質四アルキル鉛等作業主任者技能講習の、計３回を受講した。今後も、実習の安全確保や法令遵守を徹底するため、計画的に受講していきたい。
栽培環境コース	学習した専門的な知識と技術を定着させ、社会で活躍できる資質と能力を育成する。	・増養殖に関わる資格取得を推進し、知識・技術の修得に繋げる。 （小型船舶１級･２級、栽培検定１級･２級、漁業技術検定、潜水士等）	B	B	B	・　３年生修了時の平均取得数は3.5個であった。専門分野への興味・関心の高まりとともに学習意欲が高まり、多くの資格・検定に取り組んだ。また、C-Lerningを活用した受検対策は、生徒個々の生活スタイルに合わせた対応が可能であることに加え、個人と講座全体の知識の定着度合いを効率把握できたため、非常に効率的・効果的な取組となった。 基礎学力の定着が資格取得の合否に大きく影響しているため、計画的な学び直しも検討する。
	個に応じた指導を行い、希望進路の実現させる。	・コース面談を行い、希望進路や生徒個々の状況を把握し、進路実現や課題解決に必要な指導や助言を実施する。	B	B		・　平均面談回数は３回。面談週間を中心に定期的に面談を行い、希望進路やその実現のための情報提供、生徒自身の成果と課題を振り返る機会を設けた。 今後も分掌間連携を一層強化し、いつ・どこで・誰が・どのような支援を行うのかについて更に共有を深め、希望進路の実現と生徒の資質・能力の伸長に計画的に取り組む。
	先進的な増養殖技術や、ICTを活用したスマート水産業について学習し、次世代を担うために必要な知識と技術を習得する。	・外部講師を招いた学習や、プログラミングやICT機器を用いた増養殖技術について学習する。	A	A		・リージョナルフィッシュ㈱様と連携協定を結び、スマート水産教育を推進する体制を充実させた。また、海洋教育パイオニアスクールプログラムを活用して、ICT、IoTを活用したプログラミング教育に取り組んだ。
食品経済コース	コンテストでの入賞や高校生レストランの活性化を目指し、本校生徒の満足度の向上につなげる。	・外部コンテストに積極的に参加し、地域食材の発信に繋げる。	A	B	A	・　外部コンテストでの入賞回数から評価した。 →全国食品技能コンテスト　準優勝、３位 →全国和菓子甲子園近畿大会出場 →スイーツレシピチャレンジ　全国大会出場 →全国ＳＢＰ交流フェア「輝」 全国規模の大会の常連校として広報に繋げたい。
		・自分の学校に誇りを持つ生徒を育成する。	B			・　年度末評価（２年３組70.2%、３年３組82.1%）
	関係諸機関との連携を推進するとともに、生徒の声に積極的に取り入れる努力をする。	・地元の未利用資源を活用した高校生レストランやこども食堂を実施する。	A	A		・　レストランの実施回数から評価する。 →年間23回実施 地域とともに、生徒の活躍の場を保障することができた。
		・情報機器やログノートを活用し、生徒の声を授業に生かすよう努める。	A			・　ログノート及びスタディサプリの活用数から評価する。 →総合実習ごとにログノートの活用 →毎週１回スタディサプリでの配信 →保護者向けC-Learningの活用 みずなぎ便が減便される補填としてC-Learningを導入したが定着しなかった。 （保護者等のログイン　２年生15名中４名、３年14名中１名）
	コース内での研修を十分に行い、チームとして希望進路実現を目指す。	・定期的に研修会を実施し、知識・技能の伝承を行う。	A	A		・　研修の回数から評価する。 →元宝ヶ池プリンスホテル総料理長による研修 →紫野和久傳見学 →東洋食品短期大学 →和食とり松 →大和学園 今後も継続していく予定である。
		・京都府内関連企業への就職を推進する。	A			・　府内関連就職者の割合から評価する。 →就職希望者６名（府内６名、関連５名） 今後、他の学科・コースに対しても働きかけ、学校全体として、府内関連進路の割合の向上を図る。
国語科	基礎学力の定着と、国語に対する意欲・関心を高め、すべての教科の基礎となる国語力の向上に努める。	・全生徒に対し、漢字検定並びに文章検定の受検を奨め、語彙力と文章力の向上に努める。年間を通し、漢字検定については３級から２級の合格者を、文章検定については４級から準２級の合格者を、それぞれ25人以上達成することを目標とする。受検者に向けた講座を開講し、対策問題集の配布を行い、方策を行う。	D	D	D	・　第１回目の漢字検定試験を終え、合格者は６人であった。第２回目は希望者が集まらず、漢検・文章検とも実施することができなかった。約20名の受検があったが、検定試験の意義を生徒に伝えていく必要がある。
		・生涯に渡り、読書活動に親しむ態度を養うため、読書活動を推進する取組を実施する。図書館の積極的な利用や、読書活動に関わる課題、教員による推薦書の紹介、生徒が本を紹介する活動を取り入れる。学期毎に読書アンケートを取り、年間を通し「読書が好き」と答える層が60%になることを目指す。	D	D		・　夏休み中に課題図書を配布し、読書レポートを実施。また、本の紹介動画の作成を行い、教員による推薦図書をC-Learningで紹介した。今後は探究活動での図書館利用を充実させ、、プライベートな本の利用以外にも、学習や将来の職業での知的活動の場として図書を利用できるよう指導していきたい。
		・一人一台教育用端末を踏まえ、新設科目である「現代の国語」並びに「言語文化」におけるICTの積極的活用を実施する。具体的には、以下の取組を行う。 １「現代の国語」または「言語文化」の授業で週１時間ICTを使用する。 ２ 月に一度スタディサプリから課題の配信を行う。 ３ ロイロノートを利用し、課題の集約や共有を行う。 ４ スタディサプリから読書アンケートを配信する。 ５ 「書くこと」「話すこと」「聞くこと」に関わる取組で個人端末を利用する。	D	D		・　タブレット端末導入後、アンケートや報告書、本の紹介動画の作成等、表現に関わる活動を取り入れ、タブレット端末を積極的に活用した。また、スタディサプリでの課題の配信、C-Learningで授業プリントの配信を行った。スライド等を作成し、授業での積極的利用も達成できた。今年度は「利用する」「活用する」という点をクリアできたが、タブレット端末の使用が学習効果に繋がっているかどうかは疑問であった。来年度は読解力や表現力に繋がるよう、より学習効果の高い活動を考えていきたい。
地歴・公民科	地歴・公民科に対する関心・意欲・態度を醸成することで、国際社会で生きる日本人としての意識を涵養し、確かな学力を身に付けさせる。そのために、思考力・判断力・表現力を高める指導力を向上させ、主体的・対話的な学びにつながる授業改善を行う。	・定期的に小テストを実施し、学力定着に取り組む。	D	D	D	・　１学期は小テストがほとんどできなかったが、２学期以降は回数を増やすことができた。 今後、定期考査に向けての対策にもより一層つなげていく必要がある。
		・問いを考察する主体的な授業の実践により、授業満足度を高める。	D			・　学習意欲をより喚起する問いを発問できるように、日々の授業研究を深めていくことができた。また、タブレット端末を定期的に使うことで、問いに対する考察を深めることができた。
数学科	生徒一人ひとりに合わせた指導を徹底する。ICTを有効活用し、思考力・表現力を伸ばすとともに、主体的に学習に取り組む態度を育成する。 数学検定の受検を促し、数学への興味・関心と資格取得に対する意識を高める。	・以下の４項目の達成を目指す。 ・成績不認定生徒０名 ・予習を習慣化させるための指導法の確立 ・教育用端末を活用した授業の実践 ・観点別評価の年次進行に備えて、教科内での情報の共有	B	B	B	・　授業プリント等をタブレット端末へ配信するなど、少しずつ端末を利用した授業が実践できてきた。 来年度に向けて、さらなる利用につなげたい。 ・　観点別評価については、１年生で本格実施しているものについて情報の共有ができた。 ・　次年度以降も、その他の項目の達成に向けて努力していきたい。
		・以下の３項目の達成を目指す。 ・数学検定受検生徒数の増加（前年度35名） ・数学検定準２級の合格率の向上（前年度22.2%） ・数学検定の新規合格者数の増加（前年度９名）	B			・　今年度は全３回検定を実施し、受検生徒数は17名であった。授業を通して受検を呼びかけたものの、目標の人数には達しなかった。実施した３回で、準２級の合格率は50%であった。さらに２級に合格する生徒もいた。 新規合格者は７名である。

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
理科	理科の授業を通じて論理的な思考力・判断力の醸成に努める。そのために、BYODに対応したICT教材の推進や観点別評価に対応した授業づくりを推進する。	新課程の「化学基礎」にて個人端末のiPadを活用した以下の取組を行う。 ・iPadを活用したグループワークの取組 ・プリントなどの教材をiPad上で取り組ませ提出させる。 ・Formsを活用したリアルタイムでの送受信の取組 ・ロイロノートを活用した生徒間でのやりとり ・実験等の動画を共有し、理解の深化につなげる取組	C	C	C	・　当初は、タブレット端末がまだ届いていなかったので、ほぼ実行できず、生徒の各端末に課題を配信し取り組ませる活動を１回行った。 ２学期に端末が届いてからは、プリントを各生徒に配信し、記入させたものを端末から提出させるなどのやり取りは一定回数行っている。しかし、データのやりとりに工夫の余地が残る。 実験においては動画の作成まではできていない。端末のカメラを書画カメラのように使うことにとどまった。
		・観点別評価に向けて定期考査以外の評価方法を確立し、次年度以降の科目に関してさまざまなアプローチで取り組む。	C			・　科目「化学基礎」や「科学と人間生活」においてはレポートや話し合い活動などの評価材料をそろえることができた。しかし、科目「生物」や「物理基礎」においては、観点別評価を行う上での評価材料をそろえることができたとは言い難い結果となった。 今後は、学習進度の確保とさまざまな評価を行う時間の両立を考えていく。
保健体育科	安全に授業を進めるとともに、学力向上と希望進路を実現し得るたくましい生徒を育成するため、体力向上を目指す。	・体育の授業中における事故・ケガを減少させる。	C	C	D	・　骨折や靭帯損傷の大きなケガが５件発生。種目特性に応じた適切で入念な準備運動の必要性や緊張感を持った授業展開を意識しなければならないと感じている。また、苦手意識や恐怖心を持った生徒に対しての個別指導や配慮の機会を多く持ちたい。
		・15分完走における昨年度（平均9,037m）の記録を更新する。	D	D		・　１学期３回、２学期３回実施。平均8,860mであった。昨年度から177mの減少。減少要因として、コロナ禍の影響で運動形態や機会の減少による体力低下が考えられる。また、記録を狙う生徒より15分間完走を目指す生徒の割合が増加したと感じている。次年度以降は、目標値の見直しや保健体育科と生徒の目標値の共有を行い、生徒に目指させる記録を明確にしたい。
芸術科（美術）	生徒１人１人が作品と向き合う中で、高い意識をもって制作に取り組めるよう、授業規律の確保と授業態度の向上に務める。	・計画的に制作活動に取り組み、作品を期限内に完成させ、提出する。	A	A	A	・　全生徒が意欲を持続し、しっかり年間を通して前向きに取り組めた。流石、海洋生である。
家庭科	生活的自立の能力を形成するために、自ら考え判断できる力と他と共存できる力を育成する。	・家庭生活に関する基礎知識の学習プリント記入状況を確認し、学習内容の定着を把握する。	C	C	C	・　提出物（課題やプリント記入）の提出を徹底させる。
		・	C			・　エコバッグの製作を全員完成させる。（個人差は補習で） 調理実習が１回しか実施できなかった。
英語科	生徒の学びに向かう姿勢を育み、基礎力の定着を図るとともに、４技能５領域を意識した学習指導を行う。	・プレゼンテーション・スピーキングテストなど、パフォーマンス課題を与えることにより、生徒の英語学習へのモチベーションを高める。	A	A	A	・　【成果】１年生では、パフォーマンステストを５回実施した。（テーマは自己紹介、関心のある職業、店舗、テクノロジー、食材について）AETが積極的に関わることで、生徒のモチベーションを高めることができた。 【課題】２，３年生の科学科以外のクラスでは、AETを十分に活用できていないので、活用方法を工夫していきたい。
		・４技能５領域の英語力を高めるため、実用英語技能検定やGTECの受検を促し、英検の合格者数の増加を図る。	A			・　【成果】英語検定について、第１回と第２回を合わせると、受検者22名、合格者10名、合格率45％であり、健闘している。（Ｒ３年度は、受検者26名　合格者6名、合格率23％）第３回申込者は13名である。 GTECの申込者は１，２年合わせて33名であったが、コロナウイルス感染症に罹患、または濃厚接触等により、受検者は19名まで減少した。受検した生徒にとっては、英語学習の動機づけとなった。

学校運営協議会による評価	・特色ある専門教育をとおして、研究者等を始め多くの人とつながる取組は、生徒にとって有意義なものとなっている。 ・京都府南部及び他府県からの入学希望者も増加しており、寮（定員）・下宿の不足が課題となっている。女子生徒が安心して学べる環境を整えるためにも、寮・下宿の確保等が必要である。寮の根本的な整備（受け入れ可能入寮者数の増加）が、本校の今後にとっては死活問題であり、「遅きに失した」とならないよう、スピード感を持って取り組む必要がある。 ・1人1台端末については、生徒の方が教員よりも扱いに慣れていることが予想される。一方で、生徒には情報リテラシー、正しい情報を見極める力が求められる。 ・学校運営協議会として取り組んだ「地域の魅力発見のための講演会」の取組や意図を継承し、次年度も「地域で活躍する人材育成」に貢献できる活動を実施し、地域活性化に資する人材育成を期待する。

次年度に向けた改善の方向性	・学習意欲の高揚、学習環境の整備等を通じて協働する力を涵養し、希望進路実現へ繋げる。 ・家庭環境も含めて多様な生徒が在籍する中で、1人ひとりの個性を尊重した上での学習・進路指導、学力の確保と希望進路実現をさらに推進する。 ・全ての生徒が地元の良さを知り、地元定着に結びつけられるよう、北近畿の魅力(再)発見となる研修旅行を成功させる。 ・学術雑誌への論文の投稿という成果が得られた。今後さらに探究活動を進めるとともに、研究成果や探究活動そのものが地域に還元されるように活動を進める。 ・BYODについては、担当できる教職員を養成し、業務の個人への集中化を避け、個人への負担を軽減できるようにする。 ・いじめにより教室へ入り辛い生徒(グループ)があったが、解決の方向へ進めることができた。今後も継続して見守るとともに、学年部・関係分掌・保護者等が連携して指導し、全ての生徒が、教室(授業の場）へ入りたくなる授業・学校を目指す。 ・約半数の生徒が、寮・下宿で生活する。コロナ対応で得た経験やノウハウを今後の指導へ生かし、感染症そのものが起こらないような指導に取り組む。 ・アフターコロナの働き方改革として、ICTの活用、ペーパーレス化、行事の精選に取り組む。